

入間市博物館基本計画

(平成29年度～平成33年度)

みんなで創る博物館

～過去から現在、そして未来への架け橋となることを目指して～



入間市教育委員会

基本理念

市民の「心のよりどころ」となる博物館

基本方針

- 「地域」と「お茶」を主要テーマとした博物館としての運営
- 美術館的機能、文書館的機能を併せ持つ総合博物館としての運営



ALIT (アリット) とは？

「Art」美術「Archives」文書館

「Library」ライブラリー

「Information」情報

「Tea」お茶を集めた、入間市博物館の愛称です。

目 次

I	計画の策定にあたって	1
II	現状と課題	3
	(1) 資料の収集保存・調査研究	
	(2) 展 示	
	(3) 教育普及	
	(4) 博学連携	
	(5) 情報の発信	
	(6) 市民との協働	
	(7) 施設貸出	
	(8) 文化財の保護活用	
	(9) 施設の維持管理	
	(10) 来館者の推移	
	(11) 職員体制	
III	基本理念	7
IV	基本方針	8
V	運営方針	8
VI	重点的な取組み	10
	(1) 資料の収集保存・調査研究の推進	
	(2) 展示の充実	
	(3) 教育普及の推進	
	(4) 教育研究機関との連携強化	
	(5) 情報発信の充実	
	(6) 生涯学習と協働事業の充実	
	(7) 市民文化活動の支援強化	
	(8) 多様な利用者へのアプローチ	
	(9) 文化財の保護活用の充実	
	(10) 施設の維持管理の実施	
VII	計画の実現に当たって	13

I 計画の策定に当たって

<背景>

入間市では、昭和40年から旧黒須銀行の建物を郷土民芸館として使用し、民俗資料等の展示を行ってきました。また、昭和53年に開始された市史編さん事業により、地域に関する資料や調査研究成果が蓄積されてきました。入間市博物館は、これらの資料を総合的に取り扱い、新たな時代へと継承して行く施設として、平成6年11月に開館しました。

その後今日に至るまで、平成2年6月29日に入間市郷土博物館等建設審議会より答申を受けた「入間市郷土博物館建設基本計画（以下「建設基本計画」と呼ぶ）」に基づいて様々な事業運営を行い、平成14年3月には博物館法に基づく「登録博物館」に認定されました。開館以来22年間に渡って実施された各種事業の成果や調査研究の蓄積により、入間市博物館は、市内はもとより、市外・県外の多くの利用者から高い評価を得るに至っています。しかし、この間、生涯学習社会の実現が教育基本法に規定され、少子高齢社会の影響により博物館の利用形態や市民のニーズに変化が見られるなど、博物館を取り巻く環境も変わってきています。また、平成23年12月20日に文部科学省から告示された「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」では、博物館の基本的運営方針及び事業計画を策定するよう努めることが示されています。

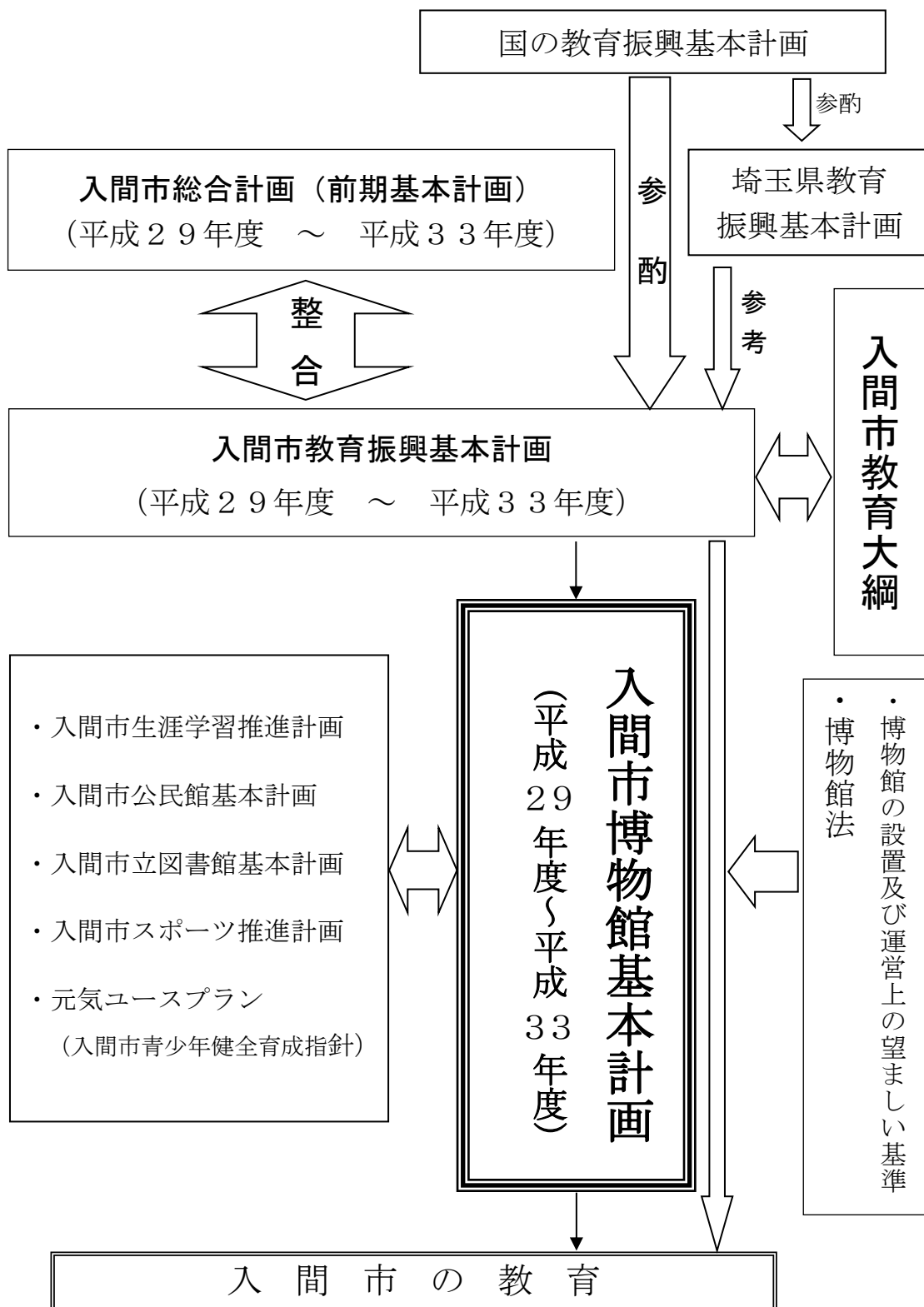
<目的>

こうした状況を踏まえ、開館以来の「建設基本計画」の内容がどの程度達成されたのか、その成果と課題を分析した上で、これからの入間市に求められる博物館を創っていくための新たな運営指針となる「入間市博物館基本計画」を策定するものです。

<位置づけ>

本基本計画は、「博物館法」「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」などを前提として、第6次入間市総合計画前期（平成29年度～33年度）及び第2次入間市教育振興基本計画（平成29年度～33年度）に基づき、その下位計画として策定するものです。なお、計画期間は、平成29年度から33年度にかけて5年間とします。

○計画の位置づけ



※入間市教育大綱とは、市長が地域の実情に応じ、市の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策について、その目標や施策の根本となる方針を定めるものです。
入間市の教育は、毎年作成します。

II 現状と課題

(1) 資料の収集保存・調査研究

資料の収集保存・調査研究は博物館活動の基本的要件であり、展示や教育普及活動の内容に大きく影響します。このため建設基本計画では、資料の対象や範囲を、入間市域のものを中心に、また関連する資料については市以外の地域のものも必要に応じて取り扱っていくとしています。これにより入間市博物館は開館以来、入間市の自然・歴史・民俗・考古・産業など、地域を構成するあらゆる要素を収集保存・調査研究の対象としてきました。また、入間市の特産物である「お茶」については、地元の「狭山茶」にとどまらず国内外を対象とし、お茶に関する自然・歴史・民俗・美術工芸など、あらゆる要素を幅広く収集保存・調査研究の対象としています。開館以来の登録された資料件数は103,500点を超え、ホームページの「資料検索」などで基本情報を公開しています。また、調査研究の成果を広く市民に公开发表するとともに、他の博物館や研究者、教育研究機関等と情報交換することで、学術の発展に寄与するため、論文集となる『紀要』を11号まで発行してきました。

しかし、調査研究には、学芸員の高度な知識と経験が不可欠であり、調査内容によっては長期にわたる経過観察や継続的調査も必要となります。また、資料所蔵者や調査協力者、調査団体等に信頼され、良好な関係を築くことも大切です。このため調査研究には、長期にわたる継続性が最も重視されます。これらを担う学芸員の専門性の向上に加えて、次世代に知識と経験を引き継ぐための人材育成が課題となっています。また、収集した膨大な数の資料については、有効に活用していくためにも、計画的な整理を行っていく必要があります。

(2) 展 示

建設基本計画において、常設展示は、自然、歴史、人物、茶を中心に入間市にかかわる様々な事象を総合的に取り扱い、「博物館の顔」になるものと位置づけられています。このため建設基本計画の内容を具現化した常設展示を製作し、現在まで展示を行ってきました。しかし、開館当初は最新で最良のものとして作られましたが、現在は経年劣化による設備や機器の故障が発生しているだけでなく、内容的にも開館以降の調査研究成果が十分に反映されていないことから、製作当初と比べその魅力と機能を大きく減じています。これは常設展示の構造が固定的で展示替えがしにくい躯体や仕様となっているためで、来館者数が伸び悩んでいる大きな要因ともなっています。このため容易に展示替えできる構造への、全面的なリニューアルが最重要課題となっています。

一方、特別展示は、常設展を更に深めるためのものとして位置づけられており、現在は地域やお茶に関する最新の調査研究成果を公开发表するアリティフェスタ特別展と、学校の授業対応を目的とした展示を年1回ずつ実施しています。建設基本計画では、世界的な美術展や市民の要望を積極的に取り入れた展示が求められており、以前はイベント企画業

者へ外部委託を行う「パッケージ展」を開催し、自然科学分野の企画や優れた芸術文化に触れる展示等を行ってきましたが、近年は予算の問題から開催は難しくなっています。しかし、子どもが楽しめる科学分野の企画や優れた文化芸術作品の展示により、これまで興味関心がなかった人へのアプローチや、市民の多様なニーズに応えていくためには、費用対効果を考えた上でパッケージ展を開催することも必要と言えます。

なお、建設基本計画では、自然に触れ、五感で体験できる展示としていくつかの屋外展示が計画され、現在茶室「青丘庵」や雑木林展示ゾーンとして「野草保存林」や「茶花の小路」等が実施されています。しかし、古民家や縄文時代復元住居等他の屋外展示については、費用対効果や目的達成のための必要性を再度検討していく必要があります。

(3)教育普及

建設基本計画では、教育普及活動は、博物館の存在そのものを意味するものとして、博物館の諸活動は教育普及活動を最終的な目的とすると謳っています。これにより現在までに様々な講座や講演の開催、刊行物の出版、体験学習の実施等を行ってきました。

現在実施している「ALIT お茶大学」や「出前講座」では、受講者の8～9割が高い満足度を示し、そこから多くのリピーターや博物館ボランティア会員が生まれています。しかし、今後も受講生のニーズに応えられるような質の高い講座を継続していく必要があります。また、『紀要』や『図録』等の刊行物や様々な媒体を通じて、継続して調査研究の成果を公開発表していくことも必要です。

また、気軽に茶文化に親しめる機会として、関係団体の協力のもと「茶会」や「お茶体験」などの体験事業を実施しています。

今後もこれらの講座の質を落とさず、また内容を刷新しながら継続して実施していくことが課題と言えます。また、過去に実施したように、近隣自治体や共通のテーマを持った博物館、教育研究機関等と連携し、単独館では実施困難な広域的な事業を行っていく必要もあります。

(4)博学連携

建設基本計画では、博物館資料の学校教育への活用と、教育的効果を高めるために博物館と学校の協力体制の整備が求められています。このため博物館では開館以来、収蔵資料や調査研究の成果を、子どもたちの教育に活かす博学連携事業を重点的に実施してきました。現在は、市内の学校に止まらず、市外の学校も来館しており、その数は延べ60校を数えます。

授業は「体験」と「地域密着」というコンセプトにより行われていますが、特に「地域密着」では、児童生徒に身近な地域に対する再発見の感動を与え、地元への愛着と誇りを持ってもらえるように心掛けています。

しかし、博学連携事業で、このようなきめ細かい対応を行うには、展示解説員や茶室対応のスタッフ等の存在が欠かせません。きめ細やかな事業を継続していくためには、学芸

員とその他のスタッフが連携を密にして研修を重ねていく必要があります。

(5) 情報の発信

広報については、開館以来の情報通信手段の変化に応じて、様々な媒体・方法により行ってきました。現在は『広報いるま』や『ニュース・アリット』、ホームページ、入間ケーブルテレビ、FM 茶笛など地域のテレビ・ラジオをはじめ、新聞、フリーペーパー、雑誌等、さまざまなメディアを利用して周知活動を行っています。しかし、来館者アンケートなどでは、まだまだ広報が足りていないという指摘があり、知りたい情報が、知りたい人へ届いていないのが課題と言えます。

一方、開館当初から「お茶の博物館」というイメージを強く打ち出してきたため、入間市博物館は「お茶」のことしかやっていないという誤ったイメージが浸透し、かえって来館者層の幅を狭めています。入間市博物館は「地域」のこともやっているという認識を持ってもらうためにも、「入間市のことなら博物館へ行けば何でも分かる」という「地域総合博物館」としての側面を市民へ強く打ち出していく必要があります。

また、入間市の自然や歴史・文化財等、地域の潜在的な観光資源を、わかりやすく噛み砕いて情報発信することで、市外から入間市を訪れる人にとっての「地域のビジターセンター」としての役割を果たしていく必要もあります。

(6) 市民との協働

建設基本計画において、博物館が十分な機能を発揮していくためには「市民参加」は不可欠であり、運営に当たり博物館を後援していく利用者の自主的組織の設置が求められています。現在の博物館の事業を見ると、市民との協働なくしては成立しないものばかりであり、特に博物館ボランティア会の活動は、入間市博物館の事業運営の特徴となっています。また、ボランティア会員以外でも、市内外でさまざまな調査研究や文化活動を行っている団体や個人の方、資料の所有者などの協力があります。博物館の事業を推進していくために、今後も市民との協働や、ボランティアとの連携を強めていく必要があります。

なお、平成28年度に ALIT お茶大学に新設した「研究生コース」は、受講生自身が研究テーマを見つけ、学芸員とともに調査研究し、その成果を博物館へ還元するというものです。今後はこうした市民の主体的な調査研究活動が博物館を拠点として行われ、地域の課題解決や学術文化の発展に活かされていく仕組みづくりが求められます。

(7) 施設貸出

建設基本計画において、博物館は市民が行う「新しい文化」の創造活動の場となることが求められています。これにより現在、市民が主体的に行う事業に当たり、市民ギャラリー・特別展示室・講座室・体験学習室・茶室について、博物館及び公的機関の事業で使用していない時に限り、有料で一般貸出を行っています。とくに美術館仕様の市民ギャラリー

一・特別展示室は、天井が高く、大型の絵画や軸装の作品も展示できるため、近隣他市からも貴重な展示施設として活用されています。

しかし、博物館の主催事業や、公民館等の事業による使用が多いため、一般に貸出しできる期間が限定されていることが課題となっています。貸出期間を増やすためには、主催事業や公民館事業の期間を圧縮するか、博学連携事業等で貸出しを行っている施設を常設展で行なえるようにすることで、一般貸出しに回せる期間を増やすことが必要です。

(8)文化財の保護活用

文化財の保護は、開館当初は博物館固有の業務ではありませんでした。現在は指定文化財の保護を図るとともに、様々な事業を通じて市民の文化財保護意識の向上に努めています。また、未指定の文化財でも継続的な調査・研究により価値を掘り起し、新たな指定文化財として保護を図っています。今後は地域の身近な文化財を活かした事業を充実させることで、市民の文化財への関心を高めていくことが課題です。

近代化遺産「旧石川組製糸西洋館」「旧黒須銀行」については、年数回の特別公開ながら、市内外から多くの来館者が訪れます。とくに西洋館は、テレビ・映画等の撮影場所として業界からも注目されており、各メディアを通じて、入間市のシティセールスの一翼を担う存在となっています。しかし、2つの建物とも建設後90年以上を経過し、建物の老朽化が著しく、保存に影響するような損傷も発生しています。このため適切な修繕により貴重な文化財としての価値を守るとともに、更なるシティセールスに繋がるように、建物の価値・魅力を生かした活用を検討し、実施していくことが必要となっています。

(9)施設の維持管理

建設基本計画では、博物館施設は、利用者の利便性等の機能面を重視するとともに、博物館全体の雰囲気が楽しく魅力的になるように考慮していくことが求められています。

しかし、現在博物館では、開館以来22年が経過し、空調設備や屋上の防水設備を中心に経年劣化による障害が多発しており、緊急的な修繕により対応しています。今後は、市の公共施設マネジメントの取り組みに則り、劣化診断を行い、修繕計画を立案することによって、計画的な改修・修繕を進めて行くことが課題となっています。

また、館内の設備は、来館者の満足度を高める上で重要な要素となっています。しかし、現在館内のトイレはほとんどが和式であり、利用者に不便を強いています。今後は来館者へ安全・安心な空間を提供するため、利用者の目線に立って、既存の設備の改修を中心に実施していく必要があります。

(10)来館者の推移

入館者は、開館当初は順調な伸びを示しましたが、平成8年度の142,822人をピークに、年により増減はあるものの概ね70,000人台で推移しています。

常設展の観覧者は、平成18年度までは25,000人前後で推移し、平成19年度以降は20,000人を下回っていましたが、平成26～27年度は特別展に牽引され20,000人台を回復しました。特別展等の観覧者は、内容や開催回数により、年度ごとに大きな増減が見られます。著名な作家による芸術作品の全国巡回展等を導入した年度には、期間中に20,000人台の観覧者がありました。平成22年度以降、特別展実施回数が年3～4回から年2回に変更になり、平成23年度以降は10,000人を下回っていましたが、平成26年～27年度は年3回の特別展を実施したことで10,000人台を回復しました。

市民ギャラリー・特別展示室・講座室・茶室等の施設利用者は、年度により増減が見られるものの、概ね40,000～50,000人台で推移しています。

一方、館庭の利用者は、来館者全体の約20～30%を占めています。また、レストランやミュージアムショップは、展示や事業以外の目的で来館される方もおり、博物館の活性化にはレストラン等の施設や広大な館庭の活用方法を検討していくことも重要です。

なお、来館者層では高校生や大学生、子育て世代の利用が少ないため、より多くの市民に博物館を利用・活用してもらえらる事業を検討していく必要があります。

註) 本項における語句の定義

- ・観覧者：常設展及び特別展を観覧した人
- ・入館者：観覧者及び施設利用者（市民ギャラリー・特別展示室、講座室、茶室等）
- ・来館者：観覧者、入館者及び館庭を利用した人

(11)職員体制

建設基本計画では、社会教育機関としての博物館機能を十分に発揮させるために、各分野に精通した学芸員を置くことになっています。現在、学芸員の人数は再任用職員を含め5名です。しかし、年齢構成を見ると1名を除き40歳半ばから60歳台で、今後10数年の間にほとんどの学芸員が退職を迎えます。

学芸員は博物館の事業運営の核となる存在ですが、その資質は長年の調査・研究、事業運営等の経験を通じて磨かれていきます。また、若手学芸員はベテラン学芸員とともに仕事をしていく中で、知識やノウハウを引き継いでいきます。このため入間市博物館の継続的な事業運営のためには、計画的な人材の確保と養成が急務となっています。

III 基本理念

～ 市民の「心のよりどころ」となる博物館 ～

入間市には、豊かな自然と誇るべき数々の文化遺産、狭山茶の主産地として広大な茶畑が広がっています。

入間市博物館は、「建設基本計画」に基づき、市民がこのような自分たちの住むまちの自然・歴史・民俗・産業・美術工芸等を理解し、入間市への愛着と誇りを深めることにより、

市民の「心のよりどころ」となることを目的に建てられました。

この目的を引き続き入間市博物館の基本理念としていくとともに、市民同士の交流や生涯学習の実践の場となるように、また、入間市の魅力を発信する施設となることを目指していきます。

IV 基本方針

(1)「地域」と「お茶」を主要テーマとした博物館としての運営

入間市博物館は、郷土民芸館や市史編さん事業によって蓄積された「地域」に関する資料や調査研究成果を引き継ぎ開館しました。また、入間市は狭山茶の主産地であり、「お茶」は地域を特徴付ける構成要素として重要な役割を担っています。このため、入間市博物館は開館以来、「地域」と「お茶」に関する様々な資料を収集・調査・保存し、展示・教育普及を行ってきており、これからも引き続き「地域」と「お茶」を主なテーマとして博物館として運営を行っていきます。

(2)美術館的機能、文書館的機能を併せ持つ総合博物館としての運営

入間市博物館は、「ALIT」の愛称に含まれている、現代の文化・芸術等の一部を扱う美術館的機能と、地域の歴史資料である古文書や行政文書を扱う文書館的機能を併せ持った施設として運営を行っていきます。また、博物館法に則り、市の自然・歴史・民俗・産業・美術工芸等を扱う「総合博物館」とします。

註) ALIT (アリット) は、様々な機能を併せ持つ入間市博物館の愛称です。

A=Art - Archives (美術館的機能・文書館的機能)

L=Library (ライブラリー機能)

I=Information (地域の情報センターとしての機能)

T=Tea (お茶に関する調査研究と情報提供をする機能)

V 運営方針

みんなで創る博物館

～過去から現在、そして未来への架け橋となることを目指して～

(1)「地域」と「お茶」をメインテーマとした運営

博物館の事業は、「地域」と「お茶」をメインテーマに位置づけ、「地域」は過去・現在・未来を繋ぐ時間の流れと空間の広がりを感じられるように、「お茶」に関しては茶を通して

世界の中の入間を意識できるような運営を行っていきます。

(2)生涯学習の場所づくり

市民が主体的に学べる場や、その学びを生かせる場と一緒に作っていくことで、生涯学習の推進とともに、博物館事業の充実を図っていきます。

(3)情報発信拠点としてのシティセールスへの貢献

入間市の歴史・自然・民俗・産業・美術工芸等の「資源」や、地域の知られざる魅力を発掘し、より分かりやすく興味を持ってもらえるように「解説・編集」して発信することで、入間市のシティセールスに貢献していきます。

博物館の運営には、博物館ボランティア会の会員、地域の住民をはじめとした市民や市民団体、それに市を超えた多くの博物館を愛する方など、大勢の方の力が不可欠です。先人たちが築いてきた歴史や伝統を受け継ぎ、未来の入間市へ守り伝えていくという博物館の持つ重要な役割を果たす上で、いま以上に大勢の方と創り上げる運営を目指していきます。

そこで、今後5年間の運営方針を「みんなで創る博物館 ～過去から現在、そして未来への架け橋となることを目指して～」とします。

なお、市の各種計画の目標においては、次のとおり事業を行うことでその実現に努めていきます。

まず、市の総合戦略である「元気な子どもが育つまち」の実現に向けては、子ども達が地域の中で生き生きと育ち、地域への愛着と誇りを持ってもらえるように、学校をはじめ社会教育や福祉など他の関係機関との連携を強めていきます。

また、第2次教育振興基本計画のテーマである「学びと実践のあふれるまち」の実現に向けては、市民が交流や生涯学習を实践する場として、博物館が有する資料や情報、施設を市民が自主的・主体的に活用できるよう取り組んでいき、博物館が市民にとっての「感動と理解、発見と探求の場」となることを目指します。

そして、第6次入間市総合計画の「みんなでつくる 住みやすさが実感できるまち いるま」については、博物館は入間市民としてのアイデンティティを育むための拠点的施設としての役割を果たすことで実現を図っていきます。

VI 重点的な取組み

本計画期間においては、「V運営方針」により各種事業を実施していくものですが、各事業のうち計画の中で特に重要なものを重点的な取組みとして位置づけて実施していきます。以下に各項目別に、重点的な取組みを記します。

(1) 資料の収集保存・調査研究の推進

資料の収集保存・調査研究は、博物館の使命に基づき行われるものであり、展示や教育普及などあらゆる博物館事業の基礎となるものです。市民の理解と協力を得ながら、対象と範囲を定め継続的・計画的に実施していきます。

- 「地域」と「お茶」に関する自然・歴史・民俗・産業・美術工芸等を中心に、資料の収集保存、調査研究を継続して行います。
- 収集した資料の有効活用を図るため、また収蔵庫を有効に活用するため、収蔵資料の整理を計画的に進めます。

(2) 展示の充実

展示は、資料の収集保存・調査研究と一体として行わなければなりません。このため常設展示は、「地域」と「お茶」を主なテーマとした展示構成としていきます。また、特別展示は、研究成果の発表や市民ニーズを踏まえた内容の展示を行っていきます。

- 常設展示は、開館以来蓄積された成果に基づき、新たな常設展示の在り方を検討し、全面的なリニューアルを目指します。
- 特別展示は、収集保存・調査研究に基づく最新の成果を定期的に発表します。また、外部から提供される企画展等を活用し、市民ニーズを踏まえた幅広い文化芸術等を提供します。

(3) 教育普及の推進

教育普及も、「(2) 展示の充実」と同じく、資料の収集保存・調査研究と一体として行わなければなりません。各種事業、刊行物、映像番組・デジタルコンテンツ等、様々な媒体や手法を通して、博物館の資産を市民へ還元していきます。

- 「ALIT お茶大学」では、初心者からリピーターまで様々な学習段階にある市民ニーズに応えられるよう、幅広く質の高い講座を継続的に実施します。
- 「茶の都出前講座」をはじめ講師の派遣依頼については積極的にこれを受け入れ、館外活動（アウトリーチ）を推進します。
- 青丘庵での「茶会」や「お茶体験」など、誰でも気軽に茶文化に親しむことが出来る機会を提供します。
- 「紀要」や「図録」などの刊行物を計画的に発行し、市民に資料の収集保存・調査研究

の成果を積極的に公開発表します。

- 地域の食文化に関する理解を深めるため、レストランと連携し、郷土料理をはじめとした料理を作って味わう等五感で感じる体験学習事業を実施します。

(4) 教育研究機関との連携強化

学校と連携して、児童・生徒の学習効果がより高まるように、博物館の資料や機能を活かした授業を行います。また、大学や研究機関等との調査研究分野での協力や、他の博物館・教育機関等との連携を強めていきます。

- 博学連携事業では、小中学校の教員との連携を密にし、博物館の資料や機能を活かした、きめ細やかな博物館授業を展開します。
- 第一線で活躍している研究者などに「ALIT お茶大学」の外部講師や、特別展の関連事業等の協力を頂き、その事業成果を博物館の調査研究に活かします。
- 他の博物館や資料館、教育機関と連携し、地域を越えた広域的な事業を行います。

(5) 情報発信の充実

教育普及事業のほか、広報紙やホームページ等を通じて博物館の情報を積極的に発信し、博物館及び入間市の魅力を PR します。また、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）をはじめ ICT（インフォメーション&コミュニケーションテクノロジー。情報通信技術）を活用し、欲しい情報をよりタイムリーに届けられるよう手法を研究し実践していきます。

- ホームページを充実させるとともに、SNS の導入・活用に努め、より多くの人にタイムリーに博物館及び入間市の魅力を PR します。
- 各種マスメディアとの連携を強め、博物館の情報をより広域に発信していきます。

(6) 生涯学習と協働事業の充実

市民の生涯学習のニーズに対応するため、体験できる場や主体的に学べる場を提供するとともに、市民がその成果を生かすことのできる場を創っていきます。また、多くの人から親しまれる博物館を目指し、各種事業への市民参画を積極的に進め、協働事業の充実を図っていきます。

- 「ALIT お茶大学」や特別展等で、市民が学習成果を発表できる場を設けることで、市民の学習意欲を高めます。
- 市民との協働の要である「博物館ボランティア会」については、会と連携して組織の拡充を図ります。
- 博物館の各種事業運営において、市民が主体的に参画できる事業形態を積極的に取り入れます。
- 資料の調査研究や、文化財の公開等の事業をボランティア会や市民団体等と協力して

行います。

(7) 市民文化活動の支援強化

展示会や講演会等をはじめ市民の多様な文化活動に施設を提供し、市民文化の発展に寄与していきます。

- 市民ギャラリーや講座室等の博物館ならではの施設を提供することで、市民の多様な文化活動をサポートしていきます。

(8) 多様な利用者へのアプローチ

市民が気軽に交流のできる場、子ども達が元気になれる場、子育て支援の場、高齢者が生き生きと活躍できる場の提供など、他の社会教育施設や行政機関等との連携により、新たな博物館利用者層の拡大に繋がる事業を実施し、博物館全体の活性化を図っていきます。

- これまで博物館の利用が少なかった高校生や大学生、子育て世代等を対象に、新たな事業や施設の活用方法を検討して実施します。
- 福祉関係の部署や団体等と連携することで、高齢者や障害者等が利用しやすい施設・設備や、展示手法・事業運営の導入に取り組みます。
- 市民の誰もが心安らぐ憩いの場として、また市民が集い活動のできる場となるように、施設や広大な館庭の活用方法を検討し、利用促進を図ります。
- レストランやミュージアムショップと連携し、共同商品の開発やタイアップ事業の実施等により新たな来館者層を呼び込むことで、シティセールスにも貢献していきます。
- 入間市の観光振興の拠点となるよう、常設展示に地域の自然や文化財を訪れてみたくなるような「ビジターセンター」の役割を持たせます。
- 博物館の集客力を高めるとともに、入間市のシティセールスにつながるように、観光に関係した機関や団体との連携を強めます。

(9) 文化財の保護活用の充実

未来へ伝えるべき貴重な文化財を保護するとともに、文化財をテーマに、市民に地域の歴史・民俗・文化等への関心を持ってもらうための事業を行っていきます。

- 市民にとっての身近な文化財を生かした文化財保護啓発事業の充実を図ります。
- 西洋館や旧黒須銀行は計画的な修繕により保存を図るとともに、地域の歴史的建造物を含む一体的な活用計画を策定し、建物の特色を活かした事業を行います。

(10) 施設の維持管理の実施

市民の誰もが安全・安心で快適な環境で施設を利用できるように、また収蔵品等が適切に保存・管理できるように、計画的な施設の改修・整備を行います。

- 博物館機能をより高めるための躯体や設備の維持改修を行います。

- 来館者の安全・安心と利便性の向上を図るとともに、ユニバーサルデザインに基づき、利用者の目線に立った整備を行っていきます。
- 博物館資料を未来にわたって良好な状態で保存するため、資料の点数、状態に応じた収蔵庫の在り方について検討していきます。

VII 計画の実現に当たって

入間市博物館の基本理念として掲げた「市民の『心のよりどころ』となる博物館」を体現していくため、この基本計画は、今後5年間の事業運営の指針となるべきものです。計画の実現に当たっては、次の3つの視点を持って進めていきます。

(1) 博物館周辺地域住民にとってのよりどころ

入間市博物館が、周辺に住む人々にとって、日常生活のなかで居心地の良い空間となるよう、また、周辺市民が集い活動する場となるよう、努めていきます。

(2) 入間市民にとってのよりどころ

入間市博物館が、入間市民としてのアイデンティティを育み、地域への理解と愛着を深め、地域への誇りを持てる場となるよう、「地域総合博物館」としての役割を果たしていきます。また、市民の生涯学習や文化芸術活動の拠点となるよう、努めていきます。

(3) 県内外に向けて入間市のシティセールスに貢献する博物館

入間市博物館が、「お茶の博物館」として独自性を打ち出し、全国に狭山茶をアピールする場となるよう、また、入間市の自然や歴史・文化財など地域の魅力を、学術的な成果の蓄積に基づいてアピールし、市外から入間市を訪れる人にとって「ビジターセンター」の役割を果たせるよう、努めていきます。

なお、計画の実現には、調査研究部門を担う体制を維持充実するため、学芸員の計画的な確保と育成が不可欠であるとともに、財源の確保も必要です。財源については、補助制度や寄付金制度等、市の独自財源以外の財源について調査・研究を進めていきます。

また、各種取り組みのうち、「博物館の顔」とも言える常設展示の全面リニューアルは、博学連携や広報活動など、その他の重点的な取り組みへの波及効果が期待され、様々な事業活性化の中核となるものです。また、旧石川組製糸西洋館の保存・活用は、シティセールスに貢献する事業と成り得ます。これらの取り組みを着実に進めていきます。



入間市博物館基本計画

発行日 平成29年4月1日

発行 入間市博物館

〒358-0015 入間市大字二本木100番地

電話 04-2934-7711

本書は再生紙を使用して作製しています。